



【連載】Vol.36

TEAM KEEP ON RACING & TEZZO

## 再び悩むエアロパーツの形状

着々と作業が進んでいる159のTEZZOバージョン。次のアイテムはエアロパーツの開発だ。クルマのキャラクターに合わせ、派手すぎずそれでいてしっかりと主張するデザインを施したリップスポイラーは、太田さんのこだわりが込められている。

文 & 撮影：陽岐麻里奈 取材協力：ファイアースポーツ <http://www.firesports.co.jp/>



デザイン画を描くより、まずはミニカーなどに粘土や紙でミニチュアのエアロを製作するのが森田氏の手法。考え過ぎるより、まずは作った方が早いのだ。



ミニチュアで形を決めたら、次は実車で形を作っていく。パテで形を整え、プロトタイプを作る。形が決まるまで、何度も修正が加えられる地道な作業。



こうして出来上がったプロトタイプのスポイラー。これは取付け用として作ったもので、これにファイバーを貼り付けて、実際のスポイラーを製作する。



TEZZOのリップスポイラーは、2.2、3.2のどちらにも使える。ボディ同色やブラックなど、カラーリングを交えるだけで雰囲気がガラリと変わるのが面白い。

159の逆台形フォルムは真正面から見ると分かる。ボディ下部に行くほど、絞られている。エアロパーツで締まることで、台形のフォルムに。

「頭と体がアンバランスなんだよね」  
太田はアルファ159を台形フォルムに近づけ、スポーティなイメージを強調したいと考えていたのだ。

さらに、太田は「ブレラっぽい、もしくは小ぶりなリップスポイラーをつけるのはどうだろうか」と森田氏に提案した。森田氏は「とにかく、やってみましよう」と早速、モックアップの製作を開始した。実は、森田氏にとって、アルファのエアロを製作するのは初めての試みだった。まずは、自分の経験とインスピレーションを信じて、考えすぎるよりもまずは形を作ってみようと思ったのだ。

ところが、実際に試作品を作ってみると、太田が言う「ブレラっぽい」「小ぶりな」エアロはつじつまが合わないことが判明した。

なぜなら森田氏は、太田の「台形フォルムにしてスポーティにしたい」という希望を取り入れ、フロントリップだけでなく、サイドステップも作りたいと考えていたからだ。そうすると、小ぶりのフロントリップでは、サイドにかけるラインがキレイにつながらなかったのだ。

一般的にOEMの手法では、コストの兼ね合いと発注先からのOKが出るかどうかで完成品のクオリティを決める。だが、森田氏は、TEZZOではとことん納得のいくものを作ろうと決めていた。単にユーザーが求めるものや流行を追うのではなく、「TEZZOはこれだ」というものを提案したいと考えた。

「小さすぎる」と特徴が出しにくいんですよ。さりげないけれども、个性的でTEZZOの主張を出したいんです」

TEZZOの主張とは――

森田氏は、TEZZOのエアロパーツを製作するにあたり、太田から影響を大きく受けたそう。それは、太田のサーキットでの経験から来るエアロダイナミクスについての説得力だった。

「外観のカッコよさは、実践での機能を反映していないと、意味がないと思う」効果の面でもエアロを装着する意味を持たせ、なおかつユーザーに提案できる形。それが今回の方向性だ。

森田氏は、とりあえず試作一号を作ってみて、それを見た太田は、「イカみたいだなあ」と明らかに不満そうだった。その原因は、純正はフロントノーズが尖っている形状だったことだ。それを反映してエアロをつけること、真ん中が「イカの頭」みたいに出っ張ってしまうのだ。そして、それでは太田が望むコーナーでのダウンフォースが得られない。

果たして、森田氏はどういう答えを見つけているのだろうか？

## 太田はTEZZOアルファ159

のエアロパーツのデザインに悩んでいた。その悩みをエアロの製作者である森田氏に相談した。森田氏は国産自動車メーカーの純正エアロや、オリジナルブランドとなるファイアースポーツを手掛けている。

「俺は159はイイと思う。ただフォルムがなあ……。シャシーを共有化した影響がもね。視覚的にも台形がカッコイイから、それをエアロで補いたい」

太田が言う「視覚的に台形」とはつまりは「こういことだ。車種間でシャシーを共有化すると、大きいサイズのクルマは裾がすぼまった形状になりがちになる」という。そうするとクラシカルな印象となるが、159の顔は神猛で近代的なイメージが強い。

「小ぶりにしたい」とも、個人的にTEZZOの主張を出したいんです」

森田氏は、TEZZOのエアロパーツを製作するにあたり、太田から影響を大きく受けたそう。それは、太田のサーキットでの経験から来るエアロダイナミクスについての説得力だった。

「外観のカッコよさは、実践での機能を反映していないと、意味がないと思う」効果の面でもエアロを装着する意味を持たせ、なおかつユーザーに提案できる形。それが今回の方向性だ。

森田氏は、とりあえず試作一号を作ってみて、それを見た太田は、「イカみたいだなあ」と明らかに不満そうだった。その原因は、純正はフロントノーズが尖っている形状だったことだ。それを反映してエアロをつけること、真ん中が「イカの頭」みたいに出っ張ってしまうのだ。そして、それでは太田が望むコーナーでのダウンフォースが得られない。

果たして、森田氏はどういう答えを見つけているのだろうか？